

「多係助詞構文」という視点：三代集における「も」と他の係助詞との共起

著者	坂田 一浩
雑誌名	熊本大学社会文化研究
巻	1
ページ	195-206
発行年	2003-03-31
その他の言語のタイトル	L'etude sur la phrase avec des poly-particules-kakari
URL	http://hdl.handle.net/2298/2468

L'étude sur la phrase avec des poly-particules-kakari

SAKATA Kazuhiro

Jusqu'à présent, la plupart des études sur la "particule-kakari" du japonais classique portaient toujours sur une seule d'entre elles dans une phrase, même s'il y en avait plus de deux. Par exemple, il existe des études sur la relation entre le modus à la fin de la phrase et la particule "mo" qui l'influence. Cependant, dans le cas où un "mo" apparaît avec un autre comme "ha", "zo", etc., qui l'influence aussi, il se peut que l'apparition des autres particules agissent sur cette relation-là. Pour mettre ce point en lumière, on a examiné dans l'anthologie de Kokin, Gosen et Shui le modus de phrases qui contiennent "mo", distinguant celui-ci avec les autres particules-kakari apparaissant sans aucune autre particule. D'après les résultats, nous avons pu confirmer qu'il existe des différences considérables entre ces deux cas et que ces différences ont un effet sur la fonction des autres particules. Ce fait démontrerait qu'il existe une action réciproque des particules entre elles dans la phrase.

- 川端善明（一九六三b）「助詞『も』の説」一、心もしのに鳴く千鳥かも
—『万葉』四八号
- 工藤美紗子（一九六三）「『も』という助詞の意味」『文学』（岩波書店）
三一巻一二号
- 同（一九七〇）「助詞モの意味と用法—源氏物語「夕顔」「若紫」におけ
る—」『清泉女子大学紀要』
- 井上博嗣（一九七二）「助詞『も』の意味とその係助詞性
—源氏物語を資料として—（前・後）」『女子大文学』六〇・六一号
- 北原保雄（一九八二）『日本語の文法』（中央公論社『日本語の世界』7）
- 尾上圭介（一九八二）「『は』の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』
五八巻五号
- 同（一九九五）「『は』の意味分化の論理」『言語』（大修館書店）二四巻
一一号
- 吉田茂晃（一九九〇）「万葉集における助詞『も』の文中用法」『島大
文』一九号
- 佐治圭三（一九九二）『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 大野晋（一九九四）『係り結びの研究』岩波書店
- 森野崇（一九九六）「奈良時代の終助詞『も』に関する考察」『二松学舎
大学論集』三九
- 同（一九九七）「奈良時代の係助詞『も』に関する考察」『二松学舎大学
論集』四〇

次頁の表は、三代集における係助詞の、係り先文末表現の傾向を示したものである。表中、括弧内の数字は、三代集各集ごとの内訳を、（古今／後撰／拾遺）の順に表している。

得るケースの存在は、この形式における文末表現が「ぞ」によって一義的に規定されるものではないということを実に示しているのであり、われわれはここにも係助詞の相互作用のありようを見てとるべきである。

おわりに

以上の考察によって、次のことが明らかとなった。

- 1、「も」の係り先の文末表現は、それが文中に単独で現れた場合と、他の係助詞と共に共起した場合とでその傾向を異にする。
- 2、また、このような現象の背後にあるものとして、そこに現れた複数の係助詞の相互規制を想定すべきである。
- 3、上記の点は、多係助詞構文という視点の妥当性を裏付けるものである。
- 4、或る係助詞がどのような文末表現をとるかを純粋に調査するためには、他の係助詞と共に共起した例を除いて考えるべきである。

注

- 1 古典語係助詞の一文中における共起現象を取り扱った先行研究としては、次のものがある。
北原（一九七九）、大野（一九九四）はともに、古典語に数多く見出される「AハBゾ」という形式について、既知と未知という情報構造の視点から分析している。
また、尾上（一九九五）は、「は」の用法のうちに、題目提示、対比のいづれでもないものが存在するとし、このような「は」を「額縁的詠嘆の『は』」と名付けた上で、「古代語のこの種の『は』は、『ゾ／＼ハーケル』という文型的条件の下に現れることが多いようであ

る。」と述べている。なお佐治（一九九一）にも、古今集や平安前期の散文を資料とした考察がある。本稿はこれら諸論考に示唆を得たところが大きい。

- 2 本来ならばまず万葉集を資料とすべきところであるが、調査の結果万葉集では、係助詞補読のものを用例から除くとすると分析に堪え得る用例数が得られなかった。また類型的な句が多かったのも気がかりな点である。そこで今回はひとまず三代集によっておよその見通しを立てた上で、改めて万葉集の例との比較検討を試みることにした。散文資料との比較も含め詳細は稿を改めて論じることとした。
- 3 大野（一九九四）八〇頁以下。
- 4 この点に関しては、拙稿「もみぢ葉もぬしなき宿は色なかりけり——古典語係助詞『は』『も』の共起について——」（熊本大学文学部国語国文学会『国語国文学研究』第三八号）において改めて論じる予定である。あわせてお読み頂ければ幸いである。
- 5 北原（一九八一）二七八～二八二頁。
- 6 これを裏から言えば、本来「かな」をはじめとする詠嘆表現をその係り先の文末にとることが稀であった「は」「も」「も」と共起することによってより多くの詠嘆表現との呼応例をもち得るようになったということができよう。いずれにせよ以上のような事実は、「は」「も」をそれぞれ単独に調査した場合には見えてこないものである。

引用本文はすべて、岩波の新日本古典文学大系本によった。ただし、表記など若干改めたところがある。

参考文献

川端善明（一九六三a）「助詞『も』の説——文末の構成——」『万葉』四七号

相思ふ吾は(万四二二五)

人知れぬ涙は袖に朽ちにけり逢ふよもあらば何につつまむ
(拾遺 六七四)

かからでも有にしものを白雪の一日もふればまさる我が恋
(同 七二八)

のように「ば」に係るケースはしばしば見出されるものの、「ど(も)／とも」に係る場合がほとんど見られず、一方「は」はこれと反対に、

わが宿の榎の実もり喫む百千鳥千鳥は(者)来れど(雖)君そ
来まさぬ(万三八七二)

君来ずは閨へも入らじ濃紫初もとゆひに霜はおくとも(古今
六九三)

武蔵野は袖ひつばかり分けしかど若紫はたづねわびにき(後
撰 一一七七)

のごとく「ど(も)／とも」と応ずる例は頻繁に見られるのであるが、「ば」と応ずるケースは極めて少ない。そのため、「——は——も」と組合わされた場合には、それは「ば」「ども」いずれとも呼応しにくいものとなるからであらうと考えられる。

さて次に、モゾ形式へ目を転じてみる。既述のようにこの形式は、単出の「も」に比べた場合、その文末表現が打消、肯定および「けり」止めに著しく偏り、その中でも肯定表現のものが全体の約半数を占めているという顕著な特徴を示している。その要因について考えるにあたっては、「も」とともに今一方の「ぞ」にも注目せざるを得ないのである。

本来「ぞ」は、表における単出の場合の傾向に顕著に窺われるように、文末に確定的な表現を要求する助詞である。この「ぞ」が一文において「も」の下に位置することにより、「も」はいきおい、

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞちりける
(古今 九)

白浪のあとなきかたにゆく舟も風ぞたよりのしるべなりける
(同 四七二)

よそにても花みること音をぞなく我が身にうとき春のつらさに
(後撰 八七)

風さむみ声よはりゆく虫よりもいはで物思ふわれぞまされる
(拾遺 七五一)

の諸例が示すように類例の暗示や極端例の提示など、文末表現との関連性よりもむしろ上接語に対する「色づけ」に重点を置いたものとなりやすいのであり、肯定表現の占める割合の高さは、このような背景において理解されるべきである。

その一方で、

ながしとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば
(古今 六三六)

心からうきたる舟にのりそめてひとひも浪にぬれぬ日ぞなき
(後撰 七七九)

思ひやるこしのしらやましらねどもひとよ夢にこえぬ日ぞなき
(拾遺 一二四二)

右のような、「も」が係り先の打消表現と密接に関わっていると見

こで古今集における次のような例を一瞥してみるならば、

年のうちに春は来にけりひととせをこそとやいはん今年とやいはん (一)

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

(三〇三)

白露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

(二六〇)

秋風の吹きと吹きぬる武蔵野はなべて草葉の色かはりけり

(八二二)

神垣の三室の山の榊葉は神のみ前に茂りあひにけり (一〇七)

四)

「Aは——けり」という、「は」によって既知とみられる題目を提示しつつ、「けり」がそれについての新たな発見を、驚きの含みをもつて表すといった構文が、和歌においては一つの型として確立されてきたことが看取されるのである。このことを念頭におくならば、

なみださへ時雨にそひてふるさは紅葉の色もこさまさりけり

岩間よりおちくる滝のしらす糸はむすばで見るとみえずしかりけり

春たちてわが身ふりぬるながめには人の心の花も散りけり

のような「AはBも——けり」という形式が、「は」がとりたてたAという主題、状況のもとで、それに関連したBという事象を「も」が「意外」の含みをもつてとりたてるといった構造をなしていることがわかるのであり、「も」が意味上、「けり」と深く関わっている一方で、「は」もまた、「けり」と構文上密接な関連性を有し

ているのである。以上のことから、「けり」の出現に「は」が深く関わっており、さきに見た数値上の傾向もこのことの反映なのではないかということが浮き彫りになってくるのである。

ここで再びさきの問題に立ち返ってみよう。そこに先立ってまず単出の「は」の文末傾向を一瞥してみる。するとそこでは、「かな」をはじめとする詠嘆表現で終止する例が極めて少ないということに気付かされる。このことを踏まえた上で今みてきた「けり」止めの場合と同様の解釈をここに当てはめるならば、ハモ形式における「かな」の発現が、今度は「は」との共起によって抑制されているのではないかという見方が成り立ち得る。ハモ形式の文末詠嘆表現の場合にみられる、あたかも単出の「は」「も」における比率を平均したかのような値は、このような要因によって導き出されたものと見るべきであろう。

以上みてきたような、単出の「も」に比べた場合の、ハモ形式におけるけり止めの増加とかな止めの減少——この事実は、係助詞の共起による文末への相互規制を何よりもよく示しているように思われるのである。

一方打消や願望表現の場合は「も」と同様、「は」も多数の呼応例をもつものである。そのため、詠嘆表現に見られたような「は」による発現規制がはたらくことなく、上述のような傾向をとるものと考えられる。

そして今一つ検討しなければならぬのは係り先に条件表現をとる場合である。さきにも触れたように、単出の「も」の場合には六一例見出されたものがハモ形式においては僅か一例しか見出されない。その要因として、「も」においては

遠音にも(毛) 君がなげくと聞きつれば(婆) ねのみし泣かゆ

りを示しているモゾ形式とをとりあげ、些か考察を試みたいと思う。まずハモ形式について見てみる。その前にここで、古典語の「は」「も」のおのの意味用法について簡単に確認しておく、そもそも古典語の「も」には類例の暗示や極端例の提示など、特定の文末表現に束縛されることの少ないものと、

やうやう夜も明けゆくに、見れば率てこし女もなし。(伊勢物語 六段)

かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや。(源氏 若紫)

秋霧はけさはなたちそ佐保山のははその紅葉よそにても見む

(古今 二六六)

君まさでけぶり絶えにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな
(同 八五二)

のように、文末の打消、願望、詠嘆などの、単純な肯定以外の表現と意味上密接に関連しているものがあり、一方「は」には題目提示と対比との二用法があることが従来から指摘されている。以上の点を踏まえた上でハモ形式の実例を検するに、

女郎花かれにし野辺にすむ人はまづ咲く花をまたくとも見ず

(後撰 一四〇一)

いはねども我がかぎりなき心をば雲居にとほき人もしらなむ

(同 八六六)

神まつる卯月にさける卯の花は白くもきねがしらげたるかな

(拾遺 九一)

もみぢ葉のながるる時は竹河のふちの緑も色かはるらむ (同

一一三一)

のように、「は」が題目提示の助詞として機能し、かつ「も」が、叙述部にあつて文末の打消などの表現と深く関わっているパターンのものが多いということが指摘できる。

単出の「も」に比べた場合ハモ形式は、打消および願望表現の占める割合が高い一方、肯定表現ではその比率が半減しているという傾向は、この点から説明できるように思われる。すなわち、この形式における「は」が提題の助詞として上に位置した結果、「も」はいきおい叙述部、つまり、より文末近くに位置するというになり、従つてそれは、文末の陳述として機能しやすい傾向を帯びるようになるのであり、またこれと表裏して特定の陳述表現との関係をもたず、文末に肯定表現をとる「も」の出現が抑えられたと解釈し得るのである。このように、題目を提示する「は」との共起が、叙述部において陳述表現と密接な関わりをもつ「も」の出現を促した、と見ることが出来るであろう。

ところで、上述の説明に拠るならば、詠嘆表現に関してもやはり打消や願望と同様、単出の「も」に比べてハモ形式の方がより高い割合を示す、はずである。しかし実際の数値はそれと全く逆の傾向を示している。打消・願望と詠嘆との間に見られるこのような対蹠的なふるまいは、はたしてどのように解釈されるべきであろうか。

この問題について考える前に、ここで一旦「けり」止めのケースについて考えてみる。今、単出の「も」「は」の数値をハモ形式のそれにつき合わせてみるならば、ハモ形式は単出の「も」よりはむしろ「は」に近い値を示しているということが見てとれる。このことは我々に、ハモ形式における「けり」の出現が、「は」によって触発されたものではないかという予想を抱かせるに充分である。そ

上でほぼ半減している。そして条件表現は、単出の「も」において六一例確認できたものが、ハモ形式では一例しか確認できず、極端に減少している。なお、推量表現等その他のものについては、ほぼ同様の比率を示している。

一方、モハ形式においては、単出の「も」やハモ形式とはまた異なった傾向が窺える。顕著な違いとしてまず指摘できるのは、「けり」止めのものが全六三例中一五例、全体の四分の一弱を占めているということであり、単出の「も」においては一割にも満たなかったのと比べ、際立った違いを示している。また、推量表現は一二例、全体の19%を占めており、これも他の二形式に比して大幅な伸びを示している。一方で、打消表現については、一七例、全体の27%と、さきものものに比べては、多少落ち込みを示している。ただ、全体を通観するに、「けり」止め、打消及び推量が文末表現の大きな柱となっており、ついで、肯定、詠嘆表現が横並びとなっているのである。

次に、モゾ形式の数値を見るならば、さらに偏った傾向を示していることに気付く。すなわち、この形式では、全体の約半数を肯定表現が占めている。ついで「けり」止めが約三割、打消が約二割を占め、ほぼこの三つに集中して現れている。

そして、単独の「ぞ」の傾向と対照させてみるならば、モゾ形式のそれが、単出の「も」「ぞ」の値の間をとったかのごとき比率を示していることが看取されるであろう。

モコソ形式の場合についても、肯定表現が約四割、「けり」止めが約二割を占め、モゾ形式同様高い数値を示している。その一方で、モゾ形式では殆ど見られなかった意志、推量表現の例がやや目につき、また打消表現の占める割合は他の形式に比して極端に低い値を示しているというように、独自のふるまいをも見せている。

以上を要するに、同じく「も」が現れている文においても、単出の場合では打消表現にやや偏る傾向を見せながらも、どの文末表現に関しても比較的均等な数値を示していたのだが、ハモ形式では肯定以外の表現の比率を増しており、一方モハ形式では打消、推量、及び「けり」止めに偏る傾向を示している。またモゾ形式においては肯定表現と「けり」止めが過半数を占め、モコソ形式もほぼ同様の傾向を示している。

そもそも「も」という助詞は文末の陳述と深い関わりをもつものである。そして「も」がどのような陳述表現と呼応しているかは、その意味をも左右する。このことを念頭におくならば、以上の事実は、少なくとも「も」の陳述呼応のありかたが、これら全てのケースにわたって一様ではないということを示している。そしてこのような相違をきたしている要因としてはやはり、文中に共起した他の係助詞によって、「も」の用法が何らかの規制を受けているということを想定せざるを得ないのである。もしそうであるならば、従来なされてきた、工藤（一九六三）や森野（一九九七）をはじめとする、「も」の係り先に関する調査——そこでは他の係助詞との共起という条件は全く考慮されていない——は、一考を要するものとなるのであり、このことは、係助詞の考察における多係助詞構文という視点の必要性を、端的に示すものであろう。

三 数値が意味するもの

——多係助詞構文における係助詞の相互規制——

それでは次に、前節において見出されたような、「も」における単出、共起双方の傾向の相違が何に起因し、かつそれがどのような意味をもつものであるのかについて、比較的多くのサンプルが得られたハモ形式と、用例数はやや少なめながらもその分布に著しい偏

- 1 条件節
- 2 連体修飾節
- 3 準体節

2、文中に含まれる係助詞の数から… (単項形式)

多項形式…

- 二項形式
- 三項形式
- 四項形式

3、組合せられている係助詞の種類、及びその出現順序によって

ハモおよびモハ形式

ハゾおよびゾハ形式 etc. (以上、二項形式)

ハ・モ・ゾおよびハ・ゾ・モ形式 etc. (以上、三項形式)

二 「も」の陳述呼応のあり方からみた多係助詞構文

本節では、文中に単出の場合と他の係助詞と共起した場合とで、「も」の文末表現との呼応のありかたがどのように異なっているかを調査しつつ、多係助詞構文という視点の妥当性について検討してみようと思う。仮に両者の場合において相互に顕著な傾向の違いが見出されたならば、それは「も」の文中における用法が他の係助詞との共起によって何らかの影響を受けているということを意味するであろう。それによって、多係助詞構文というものをとりたてて論じる意義もおのずと明らかになるように思われる。

上述の点を明らかにするために、今回は三代集を資料として調査してみた(付表参照)。集中にみられる「も」がいかなる文末表現をともなっているかを、文中単出の「も」と、他の係助詞と共起した「も」とに大別し、後者についてはさらに、その出現順序をも考

慮にいれつつ、どのような係助詞と共起しているかによって場合わけした上で調査を行った。ここでは主に、単出の「も」と、比較的多くのサンプルが得られたハモ、モハ、モゾ、モコソの四つの形式について述べてみる。

その前に一言触れておかなければならないのは、係助詞の共起という現象が、決して特殊なものではないということである。今回の調査では、三代集中の「も」全一四二五例中、28%にあたる四〇三例が何らかの係助詞をともなっているという事実を確認し得た。この点からも、係助詞の共起現象をあらためてとりあげてみる必要性を主張することができるであろう。それでは以下、具体的な数値の検討に入る。

まず単独で現れている「も」の場合の数値を表によって見るに、打消表現をとるものが三代集合計で全一〇二二例中四〇一例、39.2%と最も多い。ついで詠嘆表現のものが一七六例、17.2%、肯定表現のものが一五七例、15.3%と、この両者はほぼ拮抗している。以下、推量表現のものが七三例で7%、条件表現のものが六一例、6%、願望表現が五二例で5%、「けり」止めが四六例で4.5%、意志表現のものが三七例で2.9%と続く。

一方ハモ形式の数値を見るに、全体に占める割合が最も高いのは前項と同様打消表現で、全用例一七二例中八一例、47%にのぼる。それはまた、単出の「も」に比べてパーセンテージにして約7ポイントの上昇を示している。ほかに、単出の「も」に比べ全体に占める割合が増加を示しているものとしては、まず「けり」止めが二四例、13.9%と率にして三倍近い伸びを示しており、また、願望表現も二一例、12.2%と、倍以上の開きを示している。一方減少を示しているものとしては、まず肯定表現が八例、4.7%で、パーセンテージにして半分以下の落ち込みを見せ、詠嘆表現も一七例、9.8%と比率の

3、春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり
(古今 九七)

1は一方の係助詞が名詞修飾節中にあるケースであり、2は一方が準体句中にあるもの、そして3は、接続助詞「ど」をばさんで前後に係助詞が対置していると見得るものであり、これらはいずれも、各々の係助詞がそれぞれ異なった用言(相当語)にかかっている。そしてこのことは、とりもなおさず当該の係助詞が文中においておのおの異なったレヴェルにあるということを示している。したがって右の諸例は、前掲のものとは明確に区別されなければならぬ。

さて、以上のように規定される多係助詞構文は、その文中に占める位置、そこに含まれる係助詞の数およびその種類によって、次のように分類される。

まずそれが文中においてどのような位置づけにあるか——それは当該の係助詞がかかってゆく用言の、文中における位置づけによって一義的に決まるものであるが——に着目するならば、

女郎花かれにし野辺にすむ人はまづ咲く花をまたくとも見ず

秋風のうち吹きそむる夕暮はそらに心ぞわびしかりける

のように全体が一文の主節として機能しているものと、

桜花ささきぬる時は吉野山たちものぼらぬ峰の白雲(連体修飾節)

浦ごとに咲きいづる波の花みれば海には春も暮れぬなりけり

(以上、準体節)

逢ひみてはいくひささにもあらねども年月のごとおもほゆるかな(以上、条件節)

のように、連体修飾節、準体節、条件・接続節などの、一文中の従

属節として機能しているものとが見出される。ここで前者を「多係助詞文」、後者を「多係助詞節」と名付けることとする。

また、そこに含まれる係助詞の数に関しては、

すむ人もなき山ざとの秋の夜は月の光もさびしかりけり

おなじ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

のように、その中に二つの係助詞を含むもの、あるいは

ささめ刈る荒田のさはにたつ民も身のためにこそ袖もぬるらめ

かご山の白雲かかる峰にてもおなじたかさぞ月はみえける

のように三つを含むもの、さらには

をぎの葉にすがく糸をもささがには七夕にとやけさはひくらん

右の例のように四つを含むものがある。これらをそれぞれ、二項形式、三項形式、四項形式と呼ぶこととする。またこれになぞらえれば、

一文の中に係助詞をただ一つ含むものは単項形式と呼ぶことができる。そしてそれとの対照で、上に述べたものは多項形式と総称しうる。

一方、そこに現れている係助詞の組合せ及びその順序については、

思いつつ寝なくにあくる冬の夜の袖の氷はとけずもあるかな

のようなものをハモ形式、そしてこれとは逆の順序をとる

夕月夜ほのめくかけも卯花の咲けるわたりはさやけかりけり

のようなものをモハ形式と名付ける。他の組合せについてもこれに準ずることとする。以上述べたことを簡単に表にまとめると次のようになろう。

1、構文的機能から……

多係助詞文
多係助詞節

どれが発動するかを決定づける一つの要因として、他の係助詞との共起というものが想定されてしかるべきではなからうか。

さらに3、に關しても、たとえば「は」のような係助詞は、上述のように文構造にも密接に關わり、かつそれを規定するものなのであるが、他の係助詞が現れることで、その構造自体が何らかの容を遂げる場合があるのではないかといった点についても、仔細に検討されるべきもののように思われるのである。

本稿の目的は、如上の視点の妥当性を検証することにある。それはすなわち、一文中における複数の係助詞の共起——本稿ではこのような文を「多係助詞構文」と名付ける——をとりたてて論じることの意義を問うことである。そのための一いつの手がかりとして、今回は特に「も」をとりあげつつ、それが文中単出の場合と他の係助詞と共起した場合とで文末表現に傾向の違いが見出されないかという点について、三代集によりつつ調査してみる。周知の通り古典語の「も」は、係り先たる文末の表現と密接な関連をもち、どのような表現を文末にとるかによってその意味が左右される助詞である。したがってこれら二つのケースがその文末傾向を異にするということとは、とりも直さず共起している他の係助詞が「も」の意味発動に何らかの影響を及ぼしているということを意味するであろう。なお検討にあたっては、同一の助詞の組み合わせが一文中に出現した場合の、出現順序の違いについても留意するつもりである。その前に、上述の多係助詞構文に關して、少しく概念規定と分類とを施しておきたい。

一、「多係助詞構文」の概念規定及びその分類

前節で私は、一文中に複数の係助詞を含むものを一応、多係助詞構文と名づけた。しかし、以下これを対象として考察を進めるにあ

たっては、より厳密にその概念規定を行わなければならない。なぜならば、一口に複数の係助詞を含む文といっても、その中には以下に触れるように文構成上さまざまなものがあり、それらを一括して扱うことは、当該の多係助詞構文の本質そのものを見失うことにもなりかねないからである。

結論から先にいえば、文構成という観点から、本稿では次のものを多係助詞構文とする。

一文中に複数の係助詞を含み（ただし「もぞ」のような複合形は一つの係助詞とみなす）、かつ、その各々の承けている成分が、同一の述語用言にかかっているとといった構造をもつもの、例えば、

ちはやぶる神垣山のさか木葉は時雨に色かはらざりけり

（後撰 四五七）

よそながら思ひしよりも夏の夜のみはてぬ夢ぞはかなかりける（同 一七一）

おほかたにおくしらつゆもいまよりは心してこそみるべかりけれ（同 二九一）

のようなものである。上述の規定は、とりもなおさず次のようなケースのものが本論における当面の考察の対象から除外されるということを意味する。

1、「人もなき」空しき家は草枕旅にまさりて苦しくありけり

（万葉 四五一）

2、「ひぐらしの声もいとなく聞こゆる」は秋夕暮になればなりけり（後撰 四二〇）

「多係助詞構文」という視点

——三代集における「も」と他の係助詞との共起——

坂田 一 浩

はじめに——問題の所在——

従来の係助詞研究は、用例文中の或る一つの係助詞をとりたてて考察するといったやり方が一般的であった。たといそれが他の係助詞と共起している場合においても、である¹⁾。

ところで、この係助詞と呼ばれる一群の語に関しては、

- 1、係り結びという現象が端的に示すように、文末表現に対する強い規制力を有する。
- 2、表現主体による何らかの色付けを加えつつ或る事象を「とりたて」る。
- 3、題目提示の「は」に顕著に窺われるように、文の基本的な構造をも規定する。

以上のような特質が従来から指摘されている。このような性格をもつ係助詞が文中に複数現れる——このことはおのずと、われわれに次のような疑問を抱かせる。

まず1、に関して。そもそも係助詞は、それがかかってゆく文末を何らかの形で規定するものである。しかしそのありようは各係助詞ごとに違った様相を見せている。その一方で、これら異なる係助詞が文中に共起した場合においても、一文における文末は依然としてただ一つであるから、当該のケースにおける文末形は、はたしていずれの係助詞の規制力によるものなのかといったことが当然問題となってくる。あるいは互いの係助詞の相乗作用によって文末表現に、係助詞単出の場合とはまた異なった傾向をもたらしているのではないかといった可能性をも予想させるのである。

係助詞の共起はまた、とりも直さず文中にとりたての焦点が複数存在するということを意味する。ここで一文中における焦点相互の関係性は如何とすることが問題となってくるとともに、このような現象は、係助詞相互が文中において作用しあい、一方が他方の意味用法を規定しているのではないかという可能性をも示唆しているように思われる。すなわち、係助詞のなかには「は」「も」のように、多様な意味用法をもつものがある。ある用例において、そのうちの